

## 国際日本学コンソーシアム 「日本学における対話と深化」

2005年度から2年間、本イニシアチブではプログラムの一環として、海外の日本学研究拠点である6つの大学（韓国淑明女子大校・同徳女子大校、北京日本学研究中心、国立台湾大学、ロンドン大学アジア・アフリカ研究院、チェコ・カレル大学）との共同ゼミを実施した。このジョイントゼミは、今までの研究交流や少数の学生の長期留学という方式ではなく、多くの学生が世界の同年代の若手研究者である大学院生とゼミの場で直接交流し、意見を交換することによって、相互理解を深めるとともに、研究情報を交換して、これからのお互いの研究の発展を支え合う関係を深めようとするものである。その集大成として、これらの大学から教員と大学院生を迎え、いわば全体会として実施したのが、この国際日本学コンソーシアムである。

これらの大学は、いずれも従来から、国際日本学シンポジウムなどで日本学における学術交流を深めてきた大学であり、同時に交流協定の締結校として、盛んに留学生を交換してきたパートナーであり、こうした今までの交流の実績の上にたって実施されたことに大きな意味があると考えられる。

学生をこうした国際交流の場に参加させるということは、いままでほとんど実施されたことはなく、その必要性も、必ずしも認められていないと思われる。しかし、日本研究という地域研究あるいはカルチュラル・スタディーズの分野において、大学院生という時期に直接海外の同学の士と知己となり、お互いに研究の刺激となる関係を築くことは、実は21世紀における研究・教育の国際交流において、日本にとっても海外の日本研究機関にとってももっとも必要なことであると思われる。しかし従来の長期留学の方式では交換しうる学生の人数に限られてしまい、教員同士の教育面での交流にはならない。日常的な交流の場を作り出すことが求められてきたのである。

日本研究の分野こそ、もっとも海外との出会いが必要なのだ、という想いは、海外研修の経験を持つ友人たちにも共通したものであった。ジョイントゼミを土台に、海外の協定校との共同指導や共同学位へと発展させていく必要がある、ということは、10年ほど前から思い続け、また海外のパートナーとも話し合ってきたことであった。その構想が、まずはジョイントゼミという形で曲がりなりにも第一歩を踏み出したのである。本学に世界の6大学の教員と大学院生を迎えて実施した共同ジョイントゼミは、各大学の協力と熱意に支えられなければとても実現しなかったものだけに、今まで積み重ねてきた交流の努力が花開いたということができよう。

とくに、世界各地域から多彩な研究を展開する研究者が一同に会したことの成果は期待以上のものがあった。2大学間のジョイントゼミでの指導を受けて参加した学生も複数いたが、そのいずれもが着実な進歩をみせており、地域をまたいだ共同指導が如何に成果を上げるものか、を目の当たりに示してくれた。また、研究テーマが多地域にまたがる場合では、多くの大学から参加しているというメリットが如実に示された。こうした教育面での交流が成果を挙げたのも、日本学という場が設定され、そこに共通の研究対象を見いだしているからに他ならない。

もちろん、これまでの交流の実績の上に築かれてきた相互信頼がなければ、それも困難であったにちがいない。ジョイントゼミの構想を許してくれた大学や実現に協力を惜しまなかった本学や海外の協定校の友人たちに支えられたことにより、今回のコンソーシアムは望外の成果をあげたのである。

残念ながら、今回の国際日本学コンソーシアムに参加してくれた本学の学生は期待ほどではなかったが、これまでのジョイントゼミで築かれた友情を確認したり、懇親会や報告後の議論などにより、確実に国際交流は学生間においても進展していることが確認できたことも、ひとつの成果であった。

この企画の主人公は学生である。今回のコンソーシアムをきっかけに、学際的、国際的な研究の場である日本学の可能性に多くの若手が関心を示してくれるよう、これからも国際交流の輪を広げていきたい。

(小風 秀雅)

【日程】

12月15日

国際ジョイントゼミⅠ（日本語・日本語教育部門）

司会 森山新

指導 李徳奉、趙順文、高崎みどり、森山新

1. 星野 祐子（お茶大）「日本語相談談話の談話分析」
2. 林 科成（台湾大學）「認知言語学から見た「手」の多義性 — メトニミー表現を中心に」
3. 孫 愛維（お茶大）「第二言語および外国語としての日本語学習者における非現場指示用法の習得」
4. 楊 虹（お茶大）「中日接触場面のグループ討論における提案に関する分析」
5. 金 賢熙（同徳女子大学）「韓国の聾学校における日本語教育の実態と課題」
6. 申 恩浄（お茶大）「日本語学習者の個別性の働き — 心理類型要因を中心に —」
7. 趙 蓉（お茶大）「存在論的「にーが」構文の研究史」

12月16日

パネルディスカッション 「日本学における教育・研究の国際協力の可能性について」

パネリスト 李徳奉、趙順文、朴晋雨、郭連友、ダヴィッド・ラブス、ティモン・スクリーチ、森山新

司会 小風秀雅

国際ジョイントゼミⅡ（日本文化・日本文学部門）

司会 小風秀雅

指導 朴晋雨、郭連友、ダヴィッド・ラブス、ティモン・スクリーチ、小風秀雅

1. Alan Cummings (SOAS) 「河竹黙阿弥と明治歌舞伎の劇的地理」
2. 清水 恵美子（お茶大）「岡倉覚三のオペラ台本 “The White Fox” (白狐)をめぐって」
3. 鄭 舜瓏（台湾大學）「中島敦についての一考察」
4. Jana Ryndova（カレル大学）「文学作品・謡曲・歌舞伎における義経の伝説」
5. 陳 羿秀（台湾大學）「江戸前期と、明末清初における遊郭文化について」
6. 温 穎（北京日本学研究中心）「黄遵憲における明治日本観の転換—『日本雜事詩』の改訂をめぐって」
7. 芹沢 良子（お茶大）「日本統治期台湾におけるハンセン病対策」
8. 朴 玟宣（淑明女子大学）「占領初期の‘在日’沖繩運動—沖繩人連盟から沖繩連盟へ—」

12月17日

公開講演会「比較と交流 — 日本学における対話と深化」

挨拶 市古夏生（大学院人間文化研究科長）

司会 森山 新、ロール・シュワルツ=アレナレス、小風 秀雅

「異文化理解教育としての『交流学习』」 李 徳奉（韓国・同徳女子大学校）

「漢字圏国家の常用漢字について」 趙 順文（台湾・台湾大学）

「日本橋の図像学」 ティモン・スクリーチ（英国・SOAS）

「梁啓超と吉田松陰」 郭連友（中国・北京日本学研究中心）

「横井小楠：感情と合理」 ダヴィッド・ラブス（チェコ・カレル大学）

「開港期の釜山から見た日韓の相互認識」 朴晋雨（韓国・淑明女子大学校）

閉会挨拶 古瀬奈津子